譜牒餘録

二十二
二十三
二十四

浅野
毛利
鍋
池

内閣文庫
和書
類
號 一六三二一
冊 二二
函 四
架

内閣文庫
番號 和 16321
冊數 22（13）
函號 157 128

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

譜牒餘録巻第二十二

松平安藝守　附家臣

淺野内匠頭

蕃蹟餘録巻二十二

松平安藝守　浙家臣

瀬野内直改

松平安藝守

新春之御慶珍重存候、仍
大閤様御機嫌能御座候由承候而
目出度存候、將又兼例御下之儀
候而我等も可令同道と存候處
御拾横為御使御越之忠取候而
無之候御申参候而能御座
候へ共、こなたへ御評之御様子存候
御談合候而可有御座候、猶期面上

日本政府圖書
淺草文庫

候為不能参候然ハ猶々樣ニし

正月三日　家康御判

浅野弾正少弼殿

石田治部少輔佐和山ニ閉口相定
明日可参候子息被我々下へ
ニ指越候将井伊兵部少輔下候
恐々

十二月三日　家康御判

清須侍従殿

蜂須賀阿波守殿

浅野弾正殿

越中ニ出候ハ中納言信州口へ為相
働候為不苦許也大坂ハ大御所
陣候為御意見被入候将又

左京大夫殿万入念出陣候ハヽ
難申尽候、委細本多佐渡守
大久保十兵衛可申候、恐々謹言
八月廿四日　家康御判
浅野弾正少弼殿
右御書三通手前ニ所持仕候
書状已披見申候、仍去廿二日之
川之合戦ニ及一戦、数千人を討

捕、翌廿三日岐阜城を乗、致
一人も不洩皆討捕候注進候
候、秋来三日ニ者馬ニて中納言
中山道を相働申候間、其許之儀、御
同道候、異見次第入御念候
左京大夫殿ゟ可申入候、尤候
ぶりの城を捕候、其付籠城之人も
不残討捕候由、手柄共候て為

此度足下被推量候勢頭返書
之時候宜之儀也
八月廿八日　家康御判
浅野弾正少弼殿
此御朱書先年従横矢作写を以書付差上候
急度申入候仍内々此口下々押
寄候入候處早川口へ表向之由候

其表之様子承度候為承々
儀諸勢構向之山崎陣取候
歟一人も不相見候一正御作
説事候木同車下申合候
牧頭西帰之時節之儀也
卯月廿日　家康御判
浅野左京大夫殿
右御書手前不持候

今度之大納言殿出状為御見廻
差越候處鶉乳之以両鑓々令申候
之満足候肥前殿被成出者
種々申候處委令得心候猶幾重不
無事ニ入出精候様此方も
相通之通申達候条不能多候
恐々謹言
三月十三日　家康御判

浅野左京大夫殿

今入御念出飛札候悦之至候
此方ゟ人数百迄在戦候
之御備候者古意給申候陣於是
て可申候猶自安人て可申候不
能具候恐々謹言
後三月廿日　家康御判

淺野左京大夫殿

一 重而出折紙候ハ入念通
説急し急候ハ此方より可
越候ハ尚堅被仰付候縦毛頭入候
于地御書之候每人如設
申候然之皇尤候万事紙
相肝要存候委細井伊
兵部少輔可申候恐々謹言

閏三月五日　家康御判

丹後少将殿
蜂須賀阿波守殿
清須侍従殿
藤堂佐渡守殿
黒田甲斐守殿

其許様子承度候而以村越
茂助申候、能々御談合候而御行
出馬之儀者此方次第ニ候て、清
心安候、委細口上申候、恐々謹言
八月十三日　家康御判
加藤主計頭殿
浅野左京大夫殿

浅野左京大夫殿
村越茂助ニ一々申渡候趣
存候、何も令得其意候、委細
儀具以米津清右衛門申候条、令省
略候、恐々謹言
八月廿三日　家康御判
浅野左京大夫殿

去廿二日之御注進状今日廿六午刻
参着、就其三河表出張之処
即時及一戦数千人被討捕候
旨、早々追付之由、誠以無他
候、於此上者如何様ニも此
表出馬左右候、然者次第ニ
八月廿六日　家康御判
堀尾信濃守殿

池田備中守殿
一柳監物殿
山内対馬守殿
有馬玄蕃頭殿
松下右兵衛尉殿
浅野左京大夫殿

廿三日之御注進状今日廿七日未刻到来

披見申候、川〻ニ而鉄炮迄合戦
之上岐阜之城即時ニ責崩之
事、誠手柄難書中候、我等も
早〻出馬申候条、弥御合万
事無油断御相談尤候、謹言
八月廿八日　家康御判
浅野左京大夫殿

之表之様子ニ付、岐阜城ニ委披
見申候、度之城ニ入候由様
岐阜早速落城、其上治部少輔
人衆籠置候構迄不追ニ討
捕候、手柄共不及是非候
我等も明日出馬申候間
万事面之節可申候、恐〻謹言
八月廿九日　家康御判

浅野左京大夫殿
書状令披見候、仍大坂之儀何様
之儀ハ出合候ハヽ出陣可相候
然之隙ニ候
九月廿五日　家康御判
吉田侍従殿
浅野左京大夫殿
右御本書九通先年類焼失依写之書付差上候

於于表及一戦敵数多
被討捕之条無比類仕合
御感思召候也
四月晦日　御黒印
浅野但馬守とのへ
権現様ヨリ此御書泉州樫井合戦之節被下所持仕候

以上御書十五通

御うハ氣ニ付而被成御座候無
之心安可被存候猶以よく/\首尾
納御薬可被下度候尚出来
て恐存候恐々謹言
四月二日　秀忠　御判
中納言
浅野弾正　此下ニ字見ヘス
此御書手前所持仕

急度申入候、此度自分国府へ
出張候、為信関東迄出異見候而
御入魂之由、殊無別而其段
承入候、然者於行然旨及承
祝着之至候、将亦度令庫候
申含候条、不能具候、恐々謹言
羽武蔵守
二月十四日　秀吉　御判

浅野左京大夫殿
御使札并為御音信のかるさん三
鷹指掛、三十贈給之候、入念
儀祝着之至候、
秀頼様御息災、然者自然
度存候、猶又今度為入御座候て、最
御所望有之、早速上候而、珍重
存候、猶以来不能面上、不残

之子細従胡後書ニ付而者

儀ニ候

二月二日　秀忠御判

羽柴武蔵守

浅野左京大夫殿

出羽殿

布し然者出陣候

し見〻奉行之儀定

因府之出治道

一手之儀、何之評議出静謐

之生涯之事、

出さ〻由猛重事、相成之間

之と兄あまり出家〻変相ニさへ可

申入候而万事之重而可申入候

恐々謹言

七月十二日　秀忠御判

武蔵守　秀忠

浅左京殿
人々御中

尚以
今度其西濃ト取相候ニ付而
陣中為見舞ニて申伸候書状
儀候上洛候残多様存候以来

可申遠路ニ何角ニ大分無音
成候ニ付而御懇之書ニ預り指示
御取次奉存此表佐殿丈夫ニ
申付候条可為心安候許陣形
被急候而今少上洛候ハヽ可有参集
ニ付而入候様使者ヲ以上申候条委曲其節ニて

八月十三日
江戸中納言
秀忠　御判

浅野左京大夫殿

御宿所

御状令披見候、仍於濃州表敵数
多被討捕、岐阜城乗取付而、其元
并為加勢石田治部少輔人数
すいしやう寺山ニ籠置候処、指懸
之路迄被討果由、御手柄之段
無比類候、不及申候、将又
其口表為仕置出陣之処、於西
陣明次第ニ上方へ被出候様ニ

九月四日　秀忠　御判

江戸中納言

浅野左京大夫殿

御返報

芳札披見候、仍去十六日内府公

及一戦数多討取之尼崎之党
悉加誅戮候然処中国衆
にて御先手へ不残逐退之事ニ及ひ
不日中軍速進候由并去一日之儀
可有御面上之時可申伸候謹言
九月十九日　秀忠　御判
武蔵守
浅野左京大夫
殿

昨晩伏見迄令参着候、就中
其地敵之儀、其元節所不相叶
逃亡候以面前之下知遂ニ其処
先手ニ申候処付而不能一戦而
之所ニ犯大坂之儀我々悉取宛
及ひ毛利以代以夜依出勢旨
天下平均之事成定候由本摂申し
然而以面上可申述候謹言

九月廿四日
中納言 秀忠 御判
浅野左京大夫殿
御陣下

先札披見候仍大坂之城請取
候由得其意候殊城入念
果之候鉄炮以遣却念之御相

西丸ニ付万事等伸候
様ニと

九月廿五日
中納言 秀忠 御判
羽柴左近大夫殿
黒田甲斐守殿
藤堂佐渡守殿
浅野左京大夫殿

相　三左衛門殿

然ハ今度能々評議申下国
之由ニ候へ共不図入魂候故
使者を以此中之彼湯治候ゆへ
軍職之事者使者を以て申達候
ニ付御泊之儀一書
相成候者

十月廿日　秀忠　御判

浅野左京大夫殿　人々御中

今度尚徳為御見舞被越旅
之時分一入御懐ニ存候
早々御返事候　然ハ御中
御心得候　乃猶御気色　御叡
可存思召候　早々入候　委曲可被

寄附之状如件

十月廿九日　秀忠　御判

羽柴武蔵守

浅野左京大夫殿

出雲国

出雲杵築大社之儀従先度

当地出載重天之時分一入

之儀為存去早々出仕候

残多存候、重而可申候条

不能詳候、恐々謹言

十一月六日　秀忠　御判

羽柴武蔵守

浅野左京大夫殿

人々御中

先度者早々示锡使札到来候

今度国府上洛之儀成候処、定而以

為出上候様無之先々居候
此中霜臺滞留候而直ニ數
日つる事候程延而下申伸候条
不詳候恐々謹言
二月廿日 義景御判
淺井左京大夫殿
右御書十通先年致焼失候写之以書付差上候
今度於手前是非数儀

一 條々預數多ニ來状
一 思食候條て一所軍忠之事
一 肝要候也
九月朔日 御黒印
淺井但馬守とのへ
右従院様ヨリ此御書泉州楼并合戦之節
其外不拾仕候
以上御書十四通

一 浅野弾正少弼長政事ハ天正十四年ニ
権現様秀吉と御和睦之時長政御使仕
其後秀吉之御妹浜松之御城へ御入輿
之時長政供奉仕候由也
権現様ニハ御昵近仕候
一 同十六年従五位下ニ叙し弾正少弼ニ任せ
十七年若狭国を給て
一 同十八年正月 台徳院様御上洛之刻
御同秀吉ハ御対面同日長政宅ニハ渡御
御膳被召上候
一 同年三月朔日秀吉小田原征伐のため関
東下向駿河より到着秀吉此時
権現様之府中之御城ニ御入可有之旨兼而
不可之趣なと風説を得御城へ御入ましく
為補之有中といへとも長政随而諫申に
よりて秀吉駿河之御城ニ入御候
毎御不様御感之由事ニ候手本

権現様秀吉之軍勢を御渡しての為ニ
伊奈熊蔵ニ被仰付富士川ニおゐて舟
橋を被為作候石田又虚説申出し候故長
政諸軍に先達て渡候而人数を出し候旨
を注進申候によりて秀吉大悦ありて出
渡候沼津之城を取り　権現様を御先手之
大将と相定二万余騎引率し箱根山に
御発候刻石田又虚説さし之申候得共　長政

達而申上候秀吉疑心無之候依之小田原
早速軍功を被立候同七月　長政武州
岩付之城を攻取申候嫡子左京大夫幸
長并木村常陸介相添　権現様より本
多中務大輔平岩主計頭井伊兵部少輔
手勢を副被成本多忠勝を城へ大手を攻
平岩主計頭并木搦手より攻所白に而郭を攻
候故城中和談乞候而付長政許容致し武蔵

右申し城を請取候又国分悉城ニ向ひ従
是ハ直ニ石田佐竹宇都宮を率而攻候
事数十日ニ及ひ候共右城ハ無勢なれ共早
速落城ニ仕ひ候処長政ハ援兵和を乞候
候共石田自身ニ而取ニ不立軍を怒ラ
而長政を欺ひ而申ひハ城中ニ内意有之者
有之ひ而明日諸軍一時ニ攻ひハ速ニ而攻取
可申ニ付竹田口より攻入候処石田佐竹
宇都宮之三兵何れも勤不申候ゆへ城中
力を得ひ而竹田口を拒戦申ひ長政弥郭
を攻破ひといへとも三方ニ兵攻不申ニ付
長政不及力兵を引退申ひ因し討ひ者数
百人に及ひ是石田ヶ謀ニ而和議を破
申ひ故なり其後小田原没落仕忍城を請
取申ひ其後秀吉奥州へ御発向之節陣
奥州悉相随ひ長政関東及ひ奥州ニ検

此仕ハ数十日こらへ相定しハ九月数日秀
吉洛陽ニ帰陣有し大崎をも被遣ハ
長政をも一人たち
一 同十九年奥州南部ニ老臣九戸と申
もの奥州浪人数万人を招集め南部を侵
掠致ス候故不能制し秀吉依之秀次ハ
大将として蒲生飛騨守堀尾帯刀中
村孫兵次ハ前陣として関東ゟ向会津ニ

在陣　権現様岩手沢ニ御在陣長政
兼ても先として九戸館を攻
権現様御先手井伊兵部少輔蒲生飛騨
守当手ひゑ大ニ鉄炮長政堀尾中村
搦手より攻入追付ニし堀上ニ引ハ不
堪つ早閉ハ在所白籏取ハ事難及ニ兎角
諸将付れハ首数千余有し二て秋九戸籠り
長政之陣ニ来ル降参ハ右幼君ニ南部ニ出仕

して安堵仕候老談中降参て仕とゝ申によつて長
政許容ありて曲之白賊伐悉退散仕猶本陣に
帰候長政九戸が城下連合降候条秀次
長政が乞により不問し御許す事をいらる則
長政に命せらるゝ陣中にて九戸が城誅戮
せしめ候秀次帰陣長政上洛して九
戸を物来まいらす南部家を古来の柚
申立候

一 文禄元年秀吉朝鮮征伐したため肥前
名護屋に在陣付朝鮮より居所に従将を
沈惟敬と和議を約すといへとも和親未
相調されば秀吉
権現様と渡海之事を評議有之諸人
日城内は更に長政諫申けり秀吉自身
渡海あれたるくハ国家滅亡すへきの端而
至今日世既治る国も凶賊必起候し危

亡し道なりと申にけり秀吉大に怒て長政
を川立て為罪科し事あり　権現様尚
是を備とて長政を宥ハに佑し給ふ数
日し後薩摩し梅小文商たまへとふもの一
揆を起し肥後国に乱入し熊本城を攻
めしに秀吉大に驚給ひてたし評議有に古
政を肥後案内し者也先彼を可遣とて頻
に指遣長政先日諫不聴に当れり後日肥

後に行一揆し虚実を窺爲し左京実業
長我大将として本多忠勝を以先派出張を
可休とあり安人出馬し時に及く肥後に於
脚来梅小路に休すること其皆依し安人か
可まに不及秀吉長政に肥後国中し制法を
定させられ

一　文禄元年若狭国より二倍の加増にて甲
斐国を賜る長政天下し政務に預り又国

をもつて幸長にあたふ又別に知行を給はる

一慶長三年秀吉床重く長政石田を召して
遺言有し朝鮮在陣之軍兵をしまひ帰朝
させす我死せは大明人遠く追廻し十余万
之軍兵は此郷に死せは一代の恥辱なり
安人皆我死を秘し能業に出向し受
海しく兵を收て帰り万一事成難せは
權現様と申御事を頼て任之無に八月

十八日秀吉薨逝安人筑前博多に出張ひ
處之朝鮮より状を以申越候者鍋澤之大明
人と戦ひ而大に勝大明人引退日本軍勢
近日帰朝之仕之旨告来により数日相待軍
勢悉帰朝安人諸将を労し秀吉之遺
物をあたへ諸将各自分之領国に帰安人は上
洛に数月乃後ゑて石田増田已に威を以て
立たぬ同志の大名を党して

権現様には年肖は在伏見騒動之長政幸
長父子一定して 権現様に心をよせ申候
依之三奉行之陰謀漏候而事終に不遂
各おもはく入身を悉く離候而上下騒動い
さし候

一 慶長四年夏三奉行 権現様にはかく申上
按ハ長政伏見に居候得ハ国家騒動不止
儀に御座候而甲州に蟄居させらる趣き

し申上たにより 権現様御力及たせ給を
す長政へ武州において石田三成を佐和山に
遁居させ上杉景勝に含ミれにて謀叛
致させ 権現様関東に御發向なされ候を上
方よりも乱をも起しつゝ中ための分なり

一 同五年六月 権現様従将を引率し給
ひ会津景勝御征伐のために御發向七月廿
五日小山に御出陣時に石田三成謀叛仕と申

若末　權現様備持之由百御詳被為成
奥州之御弃置先石田之御誅戮ニて被成
し中ニ相定候此時長政幸長幕下ニ参候
然處ニ　權現様より長政ハ御供也と志
長政ハ先甲州へ参候　台徳院様中山
路を御進發候而遅參候ヘ御後見ニ付
中幸長ハ　權現様ニ御先陣として東海
道を罷下り供奉仕　九月十六日

台徳院様美濃大井ニ御参着長政御前
之以民也　權現様ゟ言上す関東御陣中
御天下御平安御治御前ニハ能々仕候毎度其
し御相手ニ参候

一 同十年長政妻子を引越江戸ニ住居仕候
台徳院様御親愛被成候依而同十一年ニ
肥州真壁ニおゐて五万石江州光船用
まて合五石拝領仕候毎度御城内御数寄

屋ヲ寄御茶屋ニ下ル　台徳院様も長政
私宅ニ毎度被為成ニ剋御膳献上仕ル同十
六年四月七日相果申ル寿六十七右之隠居
領分ハ三男浅野釆女正長重ニ拝領仕ル
一　浅野左京大夫幸長天正十八年秀吉小田
原ニ進発之時父長政ニ替り三千余騎ヲ立
て供奉五月ニ長政以勢ヲ率て武蔵岩付ニ
城ヲ攻幸長ハ毎度忠節人ニ先ヲ立大
手ニ戦攻被掛て上ニ討取首級城中ヲ攻
く長政ヲ守りく和談ニ乞調之白岩付城ヲ
請取随分合戦仕て舊豊ニ趣候秀
吉早速大功之段年ヲ感し毎度ヲ褒賞
し廣卑付之刀脱其戦功ニ付ヲ以十五歳
也忠政十五歳也
権現様より御使有之御感有之
一　文禄元年秀吉朝鮮征伐肥前名護屋

に在陣明年梅北一揆の時大将の事を令
せらる時十八歳也此年朝鮮征伐使とし
て渡海乃説ありて金山浦に舎し西生浦を
築て居し加藤清正と同く変して城郭
を攻取同巳年朝鮮和を乞ふにつゐて幸長
帰朝慶長二年大将として援兵朝鮮を救ふ
依し幸長又征伐使として渡海す大将
百万の勢にて蔚山に入むとする時大

将を前路を遮り止む於是大に戦ふ幸長
旗を摩る軍数千及馬箭も斬破らる敵於
を得すよりて大将は退く依て城より
入りを救たりと云々今年八月秀吉薨逝
十月日本兵帰朝石田増田　権現様に
背き徒党を結同家を傾んとす幸長
加藤清正黒田長政等と七人一定して
権現様に意を寄せ奉る

一慶長三年冬より同年此夏にいたり伏見
大坂のあいだ三奉行乱を起す事とたかり騒動
不止幸長終に敵国を達し候所に
御耳目となり

一同五年 権現様上杉景勝御征伐のため
下野州小山に御着陣の節石田謀叛の注進
これより数日諸道筋にて御使い諸大名
出家人等評議まちまちにして一決する事

なし 権現様御披見ありし上是も未無して然れ
ども幸長一人進みて申上ては上方大名等は
妻子を離し御供仕候上は 飯妻子上方に残置候へ
ども人質にとの旨とて思召ても早く思召
立し旨を云上仕 権現様大に御悦ありて
諸大名も一同に随ひしかば 皆誓詞を差上ぐ
幸長も先陣仕候大名と国々に差遣し小随
く各教同仕并伊奈部小輔 本多中務小輔

軍監たり八月廿二日諸将木曽川を渡し
岐阜城を攻むとす幸長と池田輝政と同
く新加納川を渡り岐阜の兵と相戦て大
に勝し數人首を討つ此軍千餘人幸長一人
として瑞龍寺の砦を攻させ遂に石田か将
柏原彦右衛門か守る所の石附壁壘を攻破
本城に至大手の門に於て柏原専ら
數百人を率ゐて又交戦す此戦首討等
走く柏原引退幸長家来佐く忠右衛門か
従卒手首戦死時首を斬事五百餘を達よ
至て又吉野原に到九月十四日
権現様赤坂にし圓山に到給ふ明日一戦て
此為呈し中於邑樗權現様輝政幸長なと
師ゆくる南宮山乃大軍御後にあり合戦
之中若兵を發せは御本営て為御難
城し可安将をは御腹心と思召仮本達へ

明日比押へとて仕へし旨御注進有之辞する
にも及ず御受仕南宮山に静に陣する时
御合戦大に御勝ゝ依而謀叛悉敗亡すそれ
より　権現様大津城に入御天下悉一統
於是創札を京都及諸国に行ひ給ひ池
田輝政播磨に則幸長に遠判に御付に
今度之軍功之人に有之故世列為御恩賞
御加増有所甲斐国を将して紀伊国を

御領せ明年紀伊守に任し従四位下に叙
せ同十八年八月廿五日相果申候享年三十八

一

浅野但馬守長晟初めより秀吉ニ御側に
勤仕せ　権現様秀吉に養女を被附御侍
に有之甚居残温而て苦りけ連は
権現様二代明成る所を御感に被成人へ渡
にあらしめ生付せ常に御賞美なし
芸之十五年大坂より京都に移り備中国

に於て二万四千石拝領 同十八年兄幸長
紀伊守病死男子無之ニ付
権現様駿州より之御旨 台徳院様上意
有之候ニ付家督として無相違紀伊国
を被下之

一 同十九年九月に大坂乱有之により長晟
紀伊国仕置申付兵一万余騎を率して住吉に
着陣し陣を今宮に居へ長晟蜂須賀
阿波守と相議し密に本多上野介を以
上意をうかがひ穢多城を攻取又舟に乗
葦嶋に渡り海面より攻入むとす城中みだ
れ仙波町を焼払捧し中に入り兵共帰白
仙波に攻入首を斬る事十余級是を岡山之軍
営に献ず 台徳院様御感成功之速なる
事を御感有之使者を以呉服を被下同十月
吉野山賊熊野之一揆と相合て一揆を起し

新宮之城を攻取むとて家老浅野右近
家臣戸田六左衛門町中并人質を取郷民二
千人を率て新宮川を渡り攻戦一揆之輩
忽敗走し谷伐鉄砲を傳々吉野郡ヘ
逃去跡を鉄炮有之右之段ニ告来ニより
て本多上野介を以言上せ
權現様御感之由之御奉書有之
今度紀州新宮表ニ而一揆共蜂起之處ニて

当度出向戸田六左衛門尉を令一揆之
者共悉追散首数多討捕其外類
働之由注進候ニ付上ニ而も段々達
上聞候處一段御感ニ候 思召候由
六左衛門方ニ而ても候由申可申達候

十二月廿三日

本多上野介
正純判

浅野右近殿

又有田日高郡大坂之催促ニより一揆を

紀州軍中ニ兵二組二千騎を遣し一揆ニ
黨を付手く兇を　上坊に差遣て本多上
野介より組頭ニ書状有し大坂和睦を乞に
よりて士卒ニ命し作事塁を毀ち隍を埋む
於是長晟帰國して又一揆ニ殘黨を誅す
同二十年大坂又大ニ起り金子を分ちし和
泉紀伊大和ニ一揆乃黨を催ス四月十八日
長晟泉州佐野川ニ出陣す　佐野ニ大野

治理亮知行所也大野主馬治房か先手中村右丈
竊ニ紀州ニ來る作事ニ来一揆の黨を催し長
晟ニ陣を襲んとすることあらわれて中村を
捕大野衆斬一揆悉く敗走　同廿九日大坂兵臣
万餘騎大野主馬を以大将とし御宿越前守
岡部大学長晟監物塙團右衛門一千餘騎
八町畷を過ぐ樫井郷ニ放火し進來時ニ
上田主水一番ニ鑓を合又敵を組付す亀田

大隅継て毛次ゟ多明助左衛門安井喜内
篠九兵衛浅野左衛門作家士八木新左衛門松
玄蕃助永田治兵衛等十餘人丹を交て八木新
左衛門塙団右衛門を討取御水と陸を合戦を
蒙る故新左衛門ハ首級取可得を得ゟ笠標
大学相さゝへる事不能して敗走す飯田を
家者数百人数所して追討して甲首十二
を得ゝり使者を以京伏見に献せし

権現様使者を御前に召而百軍し拙術を
御尋有て戦功を御感有て御教書を下
使者も又御馬を拝領して此付御本出陣
相添
従大坂相動に付而即及一戦敵数多
討捕し乗御落然し頸数披露作し
要比較御手柄し旨為御読
並御内書を安人し法使者御前に

被召出御感不斜候、彼御使遣之候

御馬并下ニ而番神寺川猪右衛門関市兵衛

下候申達候、恐々謹言

四月晦日

本多上野介
正純判

板倉伊賀守
勝重判

本多佐渡守
正信判

浅野但馬守殿
参

去廿九日於天満表御一戦之上、敵数多
候為討捕、御手前御自身御機嫌思召
計候、別而人之由使者御前被召出
御馬之下残所無之出届仕合御座候
則右衛門作先手ニ而手柄之根来并亀田
大隅上田宗古多胡助左衛門合戦之家

一　底之望本上則具達上聞候也又
御感思召候段誠ニ拙之仕合者冥加有間
敷之者右左右幸待候忠節達之

後　庄三郎
　光次判

卯月晦日

松　大重佐
　正久判

秋　但馬守
　泰朝判

浅但州様
　人々御中

猶々貴殿御律儀切々可被成御注進候
誠御手柄不及是非候得共已上
追而致啓上候大坂より去春相動
候處天下御一戦歎数多之者討捕
被成旨御注進之趣被致被聞召候處又
貴殿勲功御勤被入之御情被尽之思召一段

御祝儀之儀候御家中迄遣し候處
手筈之申候處長文殿申上候様ニ
何れも出手柄可申抽無御座候能々此
趣被仰出御感之儀候然者七日朔日是ハ
伏見へ参着之節申候委細御使者一両
人申上候猶詳し儀承出来候
被仰付出来度思召出来候相叶出来候
様相替儀出来候ニ付追而出精可申候

得其意候謹言

五月朔日　本多上野介
　　　　　　正純判

浅野但馬守殿

今度ニ敵出動候處及御合戦敵
数多討取候由出来手柄無申
計候猶追而御普請可被

御上洛御供之　　永井右近
五月朔日　　土井判
浅但馬守様
人々御中
右之節　台徳院様ゟも御教書を被下
大坂没落之後　権現様二條御城ゟ御
長晟上洛仕上意に樫井戦闘之諸士御目見
仕　御称之忠儀之上田主水正入道宗古
亀田大隅多胡助左衛門安井喜内岸九兵衛
登城被召仕候　台徳院様ゟ於伏見御目
一
見仕候而も被成式二條之二之丸
大御所様上意又軍功深御感有之家来
迄も雖有御辞退を被為懇御意被下之
一同年七月従四位下ニ叙す此冬江戸ゟ来
候迄　権現様御息女を以被嫁之元和二年

権現様御病氣甚しく長晟駿府ニ侍す
長政家之宝物玉堂之茶入を拝領す同
五年紀伊国より御加増有而安藝備後両
国を被授
一寛永三年侍従ニ任す同九年九月三日相
果寿四十七

松平安藝守光晟

以飛脚申候其普請如何候哉
其表之儀承度存之條刻以
加之儀如何様ニも可被置其心其用
之儀可承候委細舉人ニ正
可申之候也
七月廿五日　家康御判
上田主水正殿
右墨被見申之處　其侭

不慮之地震不及是非候
其地ニても有之由左候之不存知
不申候 上様御機嫌大坂御下付
無御別儀由被成之由御大慶共候
猶期面上之時候恐々謹言
後七十三日 秀忠 御判
江中納言
上主水根
い原殿

右二通之御書者松平安芸守家来上田主水所持仕候
一筆令啓候 於岩村田
此表被底切崩数ケ所
高名無比類働之由芝田七九郎
披露之寛感入候 委曲
末院之判下山可申候
十月十二日 家康 御判
白濱金兜殿

此御書松平安藝守家来白懐三郎助所持仕候

為音信鮮一折到来

喜悦之至候猶西尾小左衛門

可申候恐々謹言

二月十日 家康 御判

栢原六右衛門尉殿

改年之為祝儀遠路之処

使札殊ニ種々祝着候委曲

中村二左衛門尉可申候恐々謹言

二月廿四日 家康 御判

栢原六右衛門尉殿

右御書二通松平安藝守家来箕浦七郎右衛門

所持仕候七郎右衛門本姓栢原ニ而御座候

為此表見廻使札、殊ニ差越候
寔懇切之段令悦喜候、仍為
知行分四百石同生所之事
一職ニ進申候、猶中孫二左衛門尉
可申也、恐々謹言

九月十二日　家康　御判

柏原二郎左衛門尉殿

右御書松平安藝守家来　蒲生七郎兵衛所持
仕候処先年御出火ニ付焼失候、依寫之候書付申候

以上御書六通

覚

一 浅野弾正少弼長政事石田三成讒訴ニ付太
閤之前不宜候処
権現様度々被 仰出被下置別条無之候
依之御当家江御奉公之志深出府仕付采女
采女正長重関東江差上
台徳院様江御奉公仕候様ニ奉頼候十歳ニ而
而江戸江可遣旨 上意 慶長四年

浅野内匠頭

長重十二歳ニて江戸ニ参、下国五ヶ年正月より
台徳院様ニ御奉公仕候事

一 慶長五年奥州会津ニ御動座之砌、采女
正長重十三歳ニ而守被成御供仕候處
小山十五歳以下之者不残召連之旨相定
上意ニ而從守殿江戸ニ罷帰候

一 上方大名之世倅共江戸ニ参御奉公仕候
采女正長重始之出常之

権現様被為成、上意ニ依之慶長七年
采女正長重十四歳ニ而於常陸二万石新
知ニ被仰付難有仕合

一 慶長七年采女正長重十五歳ニ付松平
玄蕃頭娘ニ
権現様御娘子ニ被為成長重ニ被下
玄蕃頭内室也
権現様御妹子ニ而御座候、玄蕃頭内室ニ而候

長重ニ被下候姫七ツ座候而予迷惑仕候右
玄蕃頭娘君
権現様御養様御孫ニ被成候故御縁組ニ而
母ニ離候所御養様御出不便ニ被為思召哉
之御より
権現様御傍ニ被為入被御養育被為移候
依之御姫子様多被座候得共此御養女ニ清
不便ニ被為思召 浄心長政御念被ニ被為思召

一 作右此縁組ニ付 仰付候旨
上意ニ而御座候故丈嫁娶之節土井
佐渡守酒井雅楽頭土井大炊頭老中不残
出羽出雲守取持ニ而作州長重世伜内通候左
直生之節為七歳之祝儀右之御悲中
不残出羽守座敷指示謁之被下候右之
御由緒故出羽出座ニ而長重相果候ニ付病中従
大猷院様為 上使ニ而御下永井日向守雅楽

上意ニ而出座候事

一 関ヶ原御陣後、大谷母并子共為人質江戸江差
下候処、浅野紀伊守世悴安芸守嫁候故、采女正長重
儀紀伊守為人質同意ニ而思召之旨御預ケ被
為後紀伊守娘二人出生仕候、壹人ハ尾張
大納言殿御内室、一人ハ松平伊豫守妻女ニ
被仰付候事

一 慶長十八年采女正長政死去仕候付、跡式者只
今大坂五万石采女正長重ニ被仕、其恩而方
在々者指上申候、長政儀慶長十六年隠居候而
万石於大坂領地被仰付候、同十七年真壁ヨリ江
戸ニ而五千石御領付被下被為五万五千石
御並列并御年寄ニ唯今ニ至迄一所持仕候事

一 慶長十六年江戸御城桜田ニ而石垣普
請并同丙御城廻シ被仰付候 元和二年
日光御普請ニ被仰付候、其後三度日光御

菅沼主殿助ハ元和四年江戸御城出奔ニ付
依菅沼主殿助ハ寛永六年西御丸西虎口ニ掛
橋石垣菅沼并私ニ御普請被仰付
相勤候事

一慶長十九年正月大久保相模守忠隣御改
易ニ付相州小田原城請取被 仰付安藤
對馬守本多出雲守采女正長重ニ被仰付候
ニ付長重儀一番ニ小田原ニ入城請取
早速堀矢倉石垣等破却菅沼申付候以後
達上聞 為御取極事訖御感候事

一大坂冬御陣本多出雲守ニ付候 被仰付
御供仕候大坂城東ノ方信貴野迄鴫尾
山城寺家場ニ致並本多出雲守ニ御陣
取立仕寄仕候霜月廿八日信貴野口攻合
ニ付本多出雲守加勢ニ被 仰付ニ采女正
長重儀今福ヘ参候得共戦終候後故則

一 今福ニ陣取仕寄等申付候事
大坂夏御陣又本多出雲守相備候而
御付御供仕候五月六日道明寺ニ而一戦之場
本多出雲守ニ而御旗本ニ御先手候御付
出雲守相備之内ニ而残御先ニ押出候儀之
六日之夜通人数を押ニ七日之未明ニ阿部
野ニ着陣候処ニ真源有之先見ニ而不申付
阿部野ニ而備を立候侍分不残下馬仕遠

さけ候処ニ本多出雲守不知故侍共下知
候得共馬をハ引付申立候処ニ敵勝候故
城兵ハ森忠政か大勢ニ而東手之先ニ而見候故
出雲守ニ而備を進め手痛一戦仕候一ノ場ニ而
長重家人侍分三拾余人下々百余人討死仕
候処ニ長重公下知仕散々豊臣方を追立申ニ天王
寺本ニ而之長重自身手付敵追討首数
六十余討捕本丸ニ而を被下候処城際之押詰

作内城に火かけ手上り申候右阿部隼天王
寺口にして横手後日御使成采女正長重働き
上聞に達す古一不伺二拾余人を戮死其
重要別条城兵令敗北首尤数十討捕候
御感之旨に候　仰出候事

一
台徳院様御代采女正長重笠間城在城
時分大坂夏御陣長重阿部隼天王寺口
にて戦功御座候　仰出御褒美同意に笠間

城存所仕候其後古居大将氏殿にて白寄
在才にて無之候其上高七万石にて被
仰付候其真壁にて本生作大中知にて笠間之城
下置旨　御内意之　仰出候付長重申上候
共白戸之事当家にて由緒候間旧所之真壁に而本生
御座候申上度由申候上意文深正長以
募所之真壁に而由緒候て古候故指置候由に
指之申候其後奥に通　上聞に達申候

之趣御感ニ被思召候由ニ而差置候様ニ
仰付開発之地三千五百石余高ニ而為成下
万三千五百石余之御朱印頂戴之仕候事

一 内藤氏長直隠居ニ付 仰付候御朱印女正長
重御奉公之忠勤ニ付 仰立新田高三千石
同名隼人ニ被成下候事

己丑四月十二日
校了
伊藤
渡邊

毛利

譜牒餘録

廿三

国立公文書館
National Archives of Japan

譜牒餘録巻第二十三

松平長門守 附家臣

毛利甲斐守

松平長門守

仰 永承三
二十二

こたひの志らく経乃事も露しと
とけかこなされし志らしなとも
をりおもくやはりゆへ志ゐしめ
しおもちもせつう駈りおちさきさす
こもよろこびおかしめしよかと
鈍まさいしてまんしてるうきれく

おなしく山つのこゑまん下れ
事お目出度さ重ね猶めてたく
よろしく御心えてお目出
かされ候よし御心え候へ
かしく
くら人とのへ　右高
一位とのへ

今度即位大禮無事被遂其節
訖遂代遂年序之處早速被
申調依天下之美誉國家之芳
聲何事如之時運既到忠勤厳
重
叡感不浅者
天氣如此仍執達如件
二月十二日
右少辨晴豊

毛利陸奥守殿

仰 永禄之 二十二

きん中御しゆりの事

おほせいたされ候へは

たゝしくおこなはれ候

申つけられ候やうに

あるへく申候ぬるほと

うちうちかたきことにて

よろこひおほしめされ候

なをなをちさいしまいらせ

候へしなかはしおほせ

大せんのたいふ事

おほせいたされ候

よくよくなくおほせ

あされ候へく候

かしく

しし
くもんしゆる
一位とのへ

今度即位大礼無事被遂之段
訖近代送年序之處早速被申
調候天下之美誉国家之榮聲
何事如之時運既開忠勤厳重

叡感不斜者
天気如此仍執達如件
二月十二日　右少弁晴豊
毛利大膳大夫殿

錦直垂之事　隆者之處
御退身条為馳走之条免之
訖於家御心　聖護院門跡

可令演説候、猶信孝可申也

八月八日　義輝（御判）

毛利陸奥守とのへ

錦直垂之事、雖為其身之限、御

治罰之段、殊別而馳走之

条、為御褒美御免之事候、御面目

之至、尤以数鏤目人候、不可相

一　忠切可行要之、猶以雪斎可申

一　御演説候、尤懇望候也

八月八日　民部大輔信孝

毛利陸奥守殿

達之所被忠節、其上之条為

褒美、百加扶持候、除之抽粉

骨事、簡要候、委細聖護院門跡

猶聖護院准后可申候也

十二月八日　義輝（御判）

毛利陸奥守とのへ

敬白起請文前書之事

一　周防長門両國進置候事

一　父子身命異儀有間敷事

一　虚説有之付而者可遂糺明事

右條々若於偽者

梵天帝釈四大天王惣日本國中

六十余州大小神祇別而伊豆箱根

両所権現三嶋大明神八幡大菩薩

天満大自在天神可蒙御罰者也

仍起請文如件

慶長五年

十月十日　家康御書判

安藝中納言殿

毛利藤七郎殿

松壽丸

此御書御誓紙之写

今度天下之儀右中分立之処被対

秀頼様無御疎略之通尤祝之存

向後如何様之儀被成方来共対貴殿

無表裏別心如兄弟可申承候

此旨於偽申者

梵天帝釈四大天王惣日本国中大

小神祇八幡大菩薩春日大明神

愛宕白山大権現殊富士大権現之

御罰可罷蒙者也自然又従人之

雑説在之者互糾明可申寛之

為之誓紙如件

閏三月廿一日　家康御書判

安藝中納言殿

小切紙

就　公方様御政務之儀於

御當時御推量之外

殺害之處御請之出候

條御不及是非遂被申存候

各御身上候御取合候御油不

自然又東國筋御用之事承

可被仰越候之人出候

謹言

二月十四日　三河守家康　御書判

謹上　毛利右馬頭殿

御書　松平殿　請元之儀御處

御状先之御知被承候長久

下向之事細川兵部大輔殿ニて

修中入之云之候也

卯月十三日　家康御書判

安藝中納言殿

毛利右馬頭輝元事

此御内書檀紙

就火事為音信鳥目之万

千疋松板五千枚到来

委收之候也

拾遺様

八月十日　御黒印

宗瑞

安藝中納言事

此御内書高出紙

為音信鳥目令到来之喜思召

到来存收之候也

拾遺様

八月廿六日　御黒印

宗滴

此御書写之紙

一切経之手鑑一部再不足本

遠路求候而得曲見之尤忝候

中仙道之儀候

九月十二日　家康　御書判

毛利中納言殿

此御内書写之紙

今度後藤請候者之方へ入

念望中付候而遣之入魂

手迷候事誠以思食候也

猶期後

十月四日　御書判

毛利参議とのへ

此御内書写之紙

為音信南蛮酒二荷良酒柳樽　　柳合十五通り

到来候欣入候妻酒并

祝来候下申候謹言

卯月廿日秀忠　御書判

宗瑞

就當城作事之儀、間合急度手首
之程之段態〻出来精出井
大儀助之通之謹之

六月五日秀忠　御書判

幻庵

致帰之處則来納候可下段入
然候處以帰宅後安堵大久保
相模守へ可申渡之候

六月廿八日秀忠　御書判

幻庵

為音信家良風文橋廉斗
鮑一籠到来候、悦覺候

事候、委曲土井大炊助可申候、
謹言

七月二日　秀忠　御書判

幻庵

為今度上洛見廻段子鳥目
到来、殊太刀一腰馬代銀子
百枚并襴綾十巻到来候、
路次之儀江戸参之懇切之至
甚悦候、所要候委曲土井
大炊助可申候、謹言

七月十九日　秀忠　御書判

幻庵

長為子六百枚并氷砂糖三桶
被指遣候、欣悦に存候

佐渡守可申候也

九月五日 秀忠 御書判

幻庵

為重陽之祝儀、使者殊

被指越、小袖相贈之、悦入候

弥武威堅固之事、不可有油断

之旨、能々可被相心得候、猶

土井大炊助可申候也

九月九日 秀忠 御書判

幻庵

為音信、鳥子六拾枚

被相送之、殊更ニ畏悦候、委細

佐渡守可申候也

九月十五日 秀忠 御書判

幻庵

為音信江千代到来遠
入念悦思候土井大炊助可申候
謹言

九月廿八日　秀忠　御書判

幻庵

桐折二合到来悦覚候猶大久保
相模守可申候也

十月八日　秀忠　御書判

幻庵

為音信蝋燭五拾挺到桐
送候被悦然候猶土井
大炊助可申候謹言

十一月十日秀忠 御書判

竹庵

麦種二箱并明樽到来候
悦思召候猶土井大炊頭
可申候也謹言

十一月十二日秀忠 御書判

竹庵

為歳暮之祝儀小袖到来
候悦思召候然者此文可為
無此段所要之猶土井大炊
可申候也謹言

十二月十六日秀忠 御書判

竹庵

宜任

台徳院様

慶長拾三年九月十二日御判　松平長門守

周防国弐拾万弐千七百八拾七石余

長門国拾六万六千六百弐拾三石余

都合三拾六万九千四百拾壱石（目録在別紙）

事宛行之訖全可領知之状

如件

台徳院様

元和三年九月五日御判

松平長門守とのへ

為年頭之祝儀太刀一腰

馬一疋被贈之欣悦候猶酒井

讃岐守青山伯耆守可申候也

正月廿三日　家光　御書判

[illegible]

為音信使者時服五到来悦入候
猶酒井讃岐守青山伯耆守可申
候也

七月廿日　家光　御書判

松平長門守殿

一
周防国弐拾万弐千七百八拾七石余長
門国拾六万六千六百弐拾三石余都合
三拾六万九千四百拾壱石余　目録在別紙　事任
先元和三年九月五日先判之旨全
可領知之状如件

大猷院様
寛永十一年八月四日　御判

長門少将殿

此両箇條為追紙

條々

一 家中之輩於国中江並之儀不可有之
長門守附之事
付町人百姓等不窮国之様江並可申
付事

一 武事家忠之輩遂相続江並申付之
就其穏便有之者松平越後守松平出羽守
可及異儀依事之品可及言上事

一 新儀之河通之儀雖為無用其上者申付而
不可令有出国之間出羽守承届付之
面々之又為得事

一 家中之諸道之儀知行之子石以之上不
可出之雖有小身依其仕形申出之

下知状事

一 幾久も家門之儀定前度之如令

制禁候以思召付事

右之條々下知守此旨者也

嚴有院殿

慶安四年十一月廿六日 御黒印

松平千代継とのへ

大膳大夫事

此御判物紙同合

綱

承應二巳

十二月十二日 家綱

松平大膳大夫とのへ

周防國弐拾万八千七百八拾七石余長
門国拾六万六千六百弐拾三石余都合
三拾六万九千四百拾壱石 目録在之 別紙
任元和三年九月五日寛永十一年八月
四日両先判之旨充行之訖全可領知
之状如件
厳有院様
寛文四年四月五日 御判
長門侍従とのへ

此御判物紙引合

右

天和二戌
四月六日 綱吉
松平長門守とのへ

松平長門守家臣

松平長門守家来

吉川蔵人頭廣家　任侍従

吉川内蔵助廣正

吉川監物廣嘉

吉川内蔵助廣紀

右松一族ニ而在之蔵人頭廣貞

権現様御感有被仰 且存知者ニ
御座候

一 天正十八年小田原陣之節石川数人半
家初而尾州星崎之城番相勤申候處
豆州山中落城以後三州吉田之御城
主番ニ被仰付小田原落去以後
権現様御上洛之上石川数人ハ江ニ被成
御下之御馬一疋栗毛拝領仕候事

一 慶長五年
権現様奥州会津御発向之節御加勢
石川数人儀江戸ニ而之處
権現様御発向以後大坂被上意ニ付江戸ニ
石田治部少輔等就逆乱石川事関東
ニ而御留守居被仰付候ニ依而相交シ逆意相
雑元留守ニ存候者共数人ニ致一筋ニ実東ニ
可遂御地之仰候通自石川数人儀

関東依無之内黒田甲斐守方へ使者
服部治部左衛門尉差越候処ニ入候
度甲斐守所先ニ居申之由承届候ニ付被成
九郎使者差遣早速従甲斐守使者相
添刻以其所へ越館迄連候処
一 権現様へ関ヶ原へ参候者
御目見へ上 御羽織黄金子拝領仕候
則以黒田甲斐守頼候事ニ 御書

被遣之 御書者今ニ内記所持仕
一 権現様濃州赤坂御本陣ニ而上意ニ有
関東ニ而申上候趣ニ付黒田甲斐守を以吉
川蔵人殿より三浦伊右衛門を以申上候
処今及手切ニ付心底被為思召届思
召旨 御意ニて候由井伊兵部少輔直政を
以被仰付候 黄金五枚拝領仕候

異人事依而無別心人質ヲ被差上旨
且家臣粟屋十郎兵衛・中村着關ヶ原ニ
金銭おゐて廣御陣津伴ニ而存方迄も以後候
勝ニ也　御目見ニ上長刀劔ニ御陸
二本拝領之　仰付被為在子孫不朽

一　江戸之事

一　検使様関ヶ原出陣御還御之節大
坂ニ而罷上　大御所　異人ニ依而被成

御意而應申上候処大御返別之依祝儀
具足并御服千疋院拝領候
仰付候事

一　江戸御城ニ而　大御所　異人依事
被為参府ニ御勤仕御出仕被成候上
異人依ニ台所御饗應被下候上段

一　検使様ニ対被為在成候　御自書
之帷子御羽織御給小袖拝領也

俗名之事

一 吉川藤八郎ニ遣候筆蹟ニ成被
被献之之依之
台徳院様　大猷院様　厳有院様
御当代迄藤八郎子吉川内記助迄子
吉川惣兵衛子ニ而吉川内記助ニ至ル
年々右之段ハ相応ニ相成候ニ成下
御内書頂戴仕候事

指返様
免許并重ニ請取候依之禁
手本指年ニ唐國様ニ御用ニ年
明和拾壱之也
五月六日　御黒印
吉川藤八郎殿へ

此御内書奉書紙

為年頭之祝儀小袖一重送
給候喜入候猶榊原式部
大輔可申候也[illegible]
恐々謹言
十二月廿六日家康御書判
吉川侍従殿

先度ハ山芳茶二斤挽揮見事候
送之殊黒田兵庫助令憐文之到来候
就其方能々相通可申入旨
如斯伊勢守可申候也
卯月廿三日家康御書判
宗甚

右御年之祝儀被成下之内

生絹一端到来、祝着候、猶永井
右近大夫可申候也
九月二十六日　家康御書判
豊田兵部少輔殿

重陽之祝儀、小袖一重・帷
子一到来、歓悦候、猶本多
明招給可申候也

稲垣殿
九月七日　御書判
福原織部とのへ

遠方之書状具令披見候
仍入湯之儀、而已候所輝元
如見寄今下着、相延候
存知候、近日取成候事候

去比之首餘組ニ不出来候之
得之候
八月四日 家康 御書判
黒田甲斐守殿

就大事手傷之平癒
喜悦候也
猶見様
八月十七日 御黒印
榊原織部正とのへ

為端午之祝儀帷子三之内
生絹一単物到来之尚
期後喜之候之詳之
五月十五日 秀忠 御書判
立川紹佐殿

し

一昨十八日之御書面得其意候
然者先達而 大宮様御機嫌御伺
ニ被為成一段御快被遊 御機嫌
能御座候而御安心被成候様 御病
気ニ付而御菓蝋燭香品之品々
御遣頂戴いたし候御事ニ候 何
角気分宜候 時節御用心ニ被成候

肝要ニ存候 何も追々可申述候
此節ハ少々入取込ニ付残念
存候 早々如此御座候 万々期
後音之時候 恐々謹言

九月六日　松平越前守
名字未判

福原 殿

御帰之節ハ上方より九年母
橘柑之類毎年例被差上候
て被為成候御取次申上候
為御見廻申上候
極月九日　利勝
土井大炊助
利勝

一 蒲生飛騨殿

松平長門守家来
福原武蔵少輔
後越前守又改
越後守
一 右武蔵少輔事
権現様御存之節御存知ニ而居
元和ニ而御地頭居候処
一 権現様台徳院様御時代武蔵少輔
隔年重陽歳暮之御祝儀之外ニ付

之輩上物等江付而被討候共成下
一 御内書被頂戴候者子孫不残所持仕候
一 先年御両代御意ニ而私祖父共ニ
御所場続ニ御目録頂戴仕御感被成し
上ニ而右者御腰物信國御鞍置し御馬
一疋拝領仕御月毛ニ御腰物御鞍置
子孫不残所持仕候事

松平長門守家来
豊田主税助
後藤大和守
佐右蒲生

右之者共家老之者ニ御座候
権現様御代ニ御目見仕御意被成候
御両代御意之歎之物江付而候
権現様ニ討候共成下御内書之事

毛利甲斐守家治

国立公文書館
National Archives of Japan

祖父毛利甲斐守秀元
天正七年十一月七日生於備中國猿
掛城童名宮松丸
天正十三年從叔中納言輝元養秀元
為其家督實毛利伊豫守元清男母河
野出雲守越智通康女
天正十八年任右京大夫
文禄元年四月叙正四位上任侍従

慶長十一年任参議正三位
家康公慶長四年夏召安國寺及福原式
部少輔廣俊曰秀元分國之事既有殿
下之命何故遲滯到今乎二人曰處〻
諸士急難移居故及遲引非輕君命
家康公曰然則先以二十萬石可授於秀
元云〻依之以長門一國其外備中安
藝備後出雲周防國内郡村二十萬石
分領之於是秀元居于周防山口從臣
等皆安其居而甚喜之矣云〻自是嚮
慶長三年七月関白秀吉公以堀尾帯
刀吉晴中江式部少輔直澄命輝元曰
以宰相秀元欲令為山陰道之明主也
故輝元領國之内以出雲石見隠岐伯
耆半國可附與秀元矣後年終雖可讓
于秀元今先可分授之云〻且以此旨

被命秀元也此時亀井武蔵守茲矩宮部善祥坊南條左衛門尉三人相共来于秀元宅曰今日蒙可為秀元之属將之命云云雖然有四州之諸士急不得移居依之秀元未入其分國同年八月十八日秀吉公薨去其後天下不穏輝元猶不果分國之事矣此時秀元之采地無定處也従臣等苦之

慶長五年石田三成謀叛而称秀頼公之命召輝元兵輝元不决其事邪正而赴于大坂矣秀元此時在大坂石田三成又使安國寺（誘フ秀元秀元不従安国寺）言矣使老臣椙杜下總守元縁抑留輝元之上洛元縁赴于藝州不幸而海路不相遇矣輝元既到于大坂秀元大驚往謁輝元輝元曰予應秀頼公之命而今既来此也秀元曰今

度之躁動者石田三成増田長盛大谷
吉隆等所為也私聚與黨而動兵也全
非于秀頼公之意也何忽卒而来乎
家康公遥聞之而必有咎責也吾當往于
東國而告無奸曲而已輝元諾之既而
秀元歸去輝元老臣等相議曰
家康公常於秀元眷遇頗渥國郡分領之
事亦

家康公之恩也依之秀元之志在于東方
手其意不可知或疑之或難之故秀元
終不得其意也
慶長五年冬榊原式部太輔康政兼
秀忠公之旨以藤堂佐渡守高虎古田織
部正重藏兩使傳命曰今度以周防投
宗瑞矣（今年十月輝元剃髪而号宗瑞）長門者秀元持来之
國也今猶可領焉秀元敬拜謝

台命之辱而曰宗瑞以吾為嫡子吾又以藤七郎為嫡子御領以二國賜宗瑞則吾慶何物加之高虎臧宜達之耳依之宗瑞終得領二州也其後宗瑞居于長州之萩而絶於世交而為帰隠之身而讓事於秀元

慶長十一丙午年

秀忠公召秀元於江戸命城内堀石垣修築之事秀元以周防長門之士卒經之営之自三月朔日起事而至五月功成

秀忠公賜御書并衣巾於秀元労之御書文曰

遠路普請不嫌晝夜依被入情早々出来之由感悦候仍帷子并羽折袷遣候也

五月七日　御黒印

毛利宰相殿

其後秀元立藤七郎慶長四己亥年十一月十七日叙従五位下任侍従兼長門守号秀就

自豊東豊西豊田領之居長門府中矣

慶長十七年十一月廿九日嚮所嫁之

秀吉公之猴女大和大納言秀長息女

逝去同十八年之春

家康公猴松平因幡守康元之息女嫁秀

元

慶長十九年有大坂之事矣

家康公秀忠公帥師赴大坂諸将皆従

之秀元秀就留于江戸故秀元謁于水

野監物忠元曰今度臣等不従大坂之

役事奈何乎予蒙

家康公秀忠公懇情有年于茲殊

家康公以康元之女嫁我其恩遇不類于

他然漏於此挙則似有疑心乎願與秀

就共帥師相從手足下宜達之而已忠
元曰足下言實然以時宜可達
台聽勿勞意其後從伏見賜奉書於秀
元其文曰
急度申入候仍
公方様今日十日至于伏見御着座候然
者大坂表相替儀無御座候将又貴公
御事長門守殿御同道候而早〻御上
候様
上意候間其御心得可被成候恐々謹言
霜月十日
安藤對馬守
重信判
土井大炊頭
利勝判
酒井雅樂頭
忠世判
毛利宰相殿
人々御中

依是秀元倡秀就到大坂此時城中有
和親之議諸将班師兵
元和元年夏
両大君率軍攻大坂諸将従之秀元秀就
有在長門秀元在于府中秀就在萩相
去十八里也秀元馳使者與秀就相共
到大坂請従于
両大君之軍也秀就諾之然秀就出馬遅

引依之秀元四月下旬先出船到于播
州室時欲押留秀元船者秀元曰應于
家康公之召而行者也何留之乎遂引拂
出舟又有自明石岩屋両方出鉄炮令
打秀元之船者然漕出舟於沖也五月
七日黎明越長柄川押通高麗橋向極
樂橋於此處一戦得首三百級有證首
百五級乃書帳又取番舟十余艘投向

井將監忠勝也落城之後
家康公在帝都也
秀忠公在伏見也秀元往見
秀忠公酒井雅樂頭忠世奏播州出舟之
車又告於中州西國在城之諸將之中
秀元獨先来兵
秀忠公大賞之以伊丹喜之助康勝添于
秀元被達于

家康公　家康公甚感其忠思云云
元和五年福島左衛門大夫正則依無
道而遠流之時
秀忠公召秀元加藤左馬助嘉明曰正則
及其後類等若動兵則秀元嘉明二人
任之耳殊秀元者藝州之生也進退可
料之云云
寛永二乙丑年四月廿七日宗瑞逝同

年之秋

家光公曰秀吉公征伐朝鮮國之時以秀
元為軍将於彼地武勇越人也因是以
秀元為談伴時々可有登　城云々

家光公命秀元曰秀元者數寄古道之達
人也品川有故殿於此傍構茶屋可催
茶會矣秀元從
公命輕營茶屋

寛永十七年九月十六日
家光公枉駕入御茶屋酒井讃岐守忠勝
堀田加賀守正盛松平伊豆守信綱阿
部對馬守重次先來拂席其後尾張大
納言義直卿水戸中納言頼房卿松平
筑前守光高松平越後守光長保科肥
後守正之加藤式部少輔明成松平下
總守清匡共来各謁秀元告慶事

家光公午上刻入茶屋御遊催與尾張亞
相水戸黄門松平越後守加藤式部少
輔已上四人為御相伴其席以古器古
筆古畫等所〻飾之又於書院設式正
之饗應以金銀粧之治具盡美有栢子
三番
家光公賜花安吉服差於秀元秀元敬拜
戴之秀元以大内伽羅備前三郎國宗

之刀献之此香大内義隆所持云云
家光公殊有御感既而尾張亞相水戸黄
門及列候皆蒙命而先帰去昨夜之時
雨属晴月出於東海之上美景無窮於
是召於東海寺之院主澤庵和尚而殊
有興
家光公進盃命秀元令詠當座一首和歌
其歌曰

降雨モ今日トヤ晴ル、ワカ君ヲ待エシ山ノカハ
アリケリ

澤菴和尚有和歌茶屋之傍多置陶器
家光公取香合二箇而使満座満庭之衆
以目利令取之庭上木枝掛花篭有回
花事入興亥中刻還御也

正保元年八月
家光公命秀元於西丸山里再令催茶會之
興其後賜奉書其文曰
其方獻御茶候儀此間依雨天被差延
斷属晴候條来七日於西丸御茶可差
上旨被仰出候自然雨降候者相延可
申候可被得其意候恐々謹言

阿部對馬守
重次判

十月四日
阿部豊後守
忠秋判

松平伊豆守
信綱判

毛利甲斐守殿

七日雨未晴故以九日為其期於山里
數寄屋者昔時
秀忠公命古田織部正重臧所令營作也
自十月五日飾西丸御殿十月九日

家光公到山里之數寄屋松平伊豆守信
綱阿部對馬守重次阿部豊後守忠秋
小堀遠江守宗甫内田信濃守正信小
出越中守尹貞岡田淡路守齋藤攝津
守三友朽木民部少輔稙綱其外侍臣
二十五人從之稲葉美濃守正則永井
右近大夫尚征接之進酒食酒井河内
守忠清酒井靫負佐忠直土井遠江守
利隆青山大膳亮幸利太田備中守資

宗安藤右京進重元以外之從者役人
等若干是皆殘居西丸御殿不来于山
里之數寄屋堀田加賀守正盛永井信
濃守尚政阿部備中守定高柳生但馬
守宗矩此四人數寄屋侍座為御相伴
其後於御殿有式正饗應進酒盃之時
太刀守家馬代黄金十兩綿二百把青
江刀献之酒井河内守忠清奏之賜尊
盃於秀元時来國俊之刀呉服二十賜
之秀元室家錦繡珍二十巻賜之有猿
樂五番猿樂畢而於數寄屋有廻花事
此時秀元献尊圓所筆伊呂波松平伊
豆守信綱奏之以金森丸壺茶入賜秀
元信綱傳之酉之下刻還御也此時山
里西丸御殿兩所饗應盡善盡美也
秀忠公家光公每歳冬十月賜御鷹之鴫

夏六月賜菓子瓜林檎等示其厚情
家光公召尾張大納言紀伊大納言水戸
中納言催茶會或賜暇赴其封國之時
召秀元令侍其座且又
家光公或遊尾張大納言紀伊大納言宅
或光臨井伊掃部頭別館時亦使秀元
為食座伴豫賜奉書示其期也奉書數
簡今猶在家

慶安三年冬十月臥病十月二十七日
家光公使松田善右衛門尉問於秀元病
賜白梭一箱閏十月三日秀元終逝春
秋七十二歲葬於江戸芝之萬松山泉
岳禅寺号知門寺功山玄誉大居士
後十一月八日
家光公使松平伊賀守忠勝弔於秀元忠（死）
勝來向男和泉守光廣傳

尊命云云

貞享元甲子年八月廿七日

毛利甲斐守綱元

譜牒餘録　巻第廿四

鍋嶋

池田

己巳四月十三日

校了

伴友

俊友

譜牒餘録巻第二十四

松平丹後守 附家臣

松平相模守 附家臣

松平伊豫守 附家臣

松平丹後守

覚　安西書

一 大御所様加賀守ニ於百家國本仕置等ニ付
御尋候頂戴今ニ忘失無仕候事

一 安國法式いろくの事候之

一 國中定め未之儀候之ニ申遣候事

一 度々於御伽候自然世之いろ様々

一 儀被出来候とも佐賀逢池安堵之儀ハ
丈夫ニおかれへ候ゆへ一篇之覚悟仕候也

一 上意并命之趣御用ニ可相立之事

一 親類之内其身並妻子在江戸仕候、又
家中諸侍ニいたるまて申しつくへし
之事

一 附親子兄弟之外ニ申つかはし候人数之事

右之

正月十六日

信濃守判

加賀守判

義候儀何篇之儀ニ候共無御別儀ニ候

以上之通無御座候上野介相談

くりく本調もち披見以後可被懸子

も其段人々ニ依候ニ依年寄ニ候之

申

十月廿一日

本多佐渡守判

鍋島加賀守殿

同 信濃守殿

本多上野介判

為音信御礼書状殊生衣
預ん候喜入候委細猶候
令祝着候委細井伊兵部
少輔可申候条寒暑時分能々
養生候
六月十七日　家康御判
鍋嶋加賀守殿

就佐渡守指下祝着之由候
其元再書一勝之一通書来
候於御為御樽御義致去御
覚悟之事尤候也及合戦
敵数多討捕之由誠粉骨之至候
精々感悦候委曲井伊兵部
少輔可申候也
十一月六日　家康御判

鍋島加賀守殿

二要ハく書状之趣令披見候
尤ニ而委細之段三要可申候
也しるもの必然候也可遂候
十二月晦日　家康御判
鍋島加賀守殿

也就札弄紅糸拾斤　褐褌二贈
候喜悦之至入念之段欣悦
且作絶土円厨ハ到来令満
之事本多佐渡守具申候条
被見届候深入魂て為年代
何様て令上洛之節万て
十承可相済不國之申可存候
将之使て申達候之条不能巨細

恐々謹言

六月六日　秀忠御判

鍋嶋加賀守殿　細川武蔵守

御報

為歳暮之祝儀小袖一重贈

給之遠路思召入念之段喜

悦之至候将又去秋大坂中華以為

其心之儀之段無是又雖申出者

何様不審之儀之旨以面談可申

下中伸候猶本多佐渡守可申入

候恐々謹言

江戸中納言

極月晦日　秀忠御判

鍋嶋加賀守殿

御報

以上

態申入候、然者大坂下之雑
説有之候、自然手切ニも成候ハゝ
中国筋之御人数ハ兵庫
西宮尼崎辺可被差出由
御意ニ候間、可被成其御心得候
以書状申入候、様子追而可申継
大御所様御上洛も被成候、猶以其方
事者御用ニ可被成候間、御用ニも
候ハゝ可被仰付候、何事ニても可被申候
彼是御油断有間敷候
右之段可申入如此候、恐惶謹言

卯月七日　本多上野介
正純

蜂須賀阿波守殿

以上

然者今度於大坂下々雑
説申候由承候而切ニ不成
候て中国西国之御人数ハ最早
罷上候又所請候之由被仰候
御用之由御諚にて如此候得共
申候御尤ニ存候間ハ如此之
大御所様御上洛之儀ハ如在候

事候間ニ成候御分ニ御用之
由御意之趣此方ニ而右之通先
書ニも申入候得共去年儀ハ有
御座候様存候処ニ付而お書
様子何も不存候ニ付御座候て如此ニ候
恐々謹言

卯月八日　　本多上野介
　　　　　　正純

鍋嶋信濃守殿

以上

一 其元被致帰国候而御苦労ニ存候
入念之為御談合入御念候哉
猶可被申候 寧相様御気色之為
大御所様之月々被成御沙汰被成
尾州名古屋へ御座被成候得共
御機嫌能候由承及御座候由
為御心得申入候而御使者大坂雑説
中々無之候自然 大御所様思召様ニ
不相叶候而者御座候由御沙汰被成候
御座候処右御心得御座候由被成御除
用ニ立候様ニ御待被成候由御保候方々
出来候処右之趣候ハヽ
大御所様御上洛被成候ハヽ御出馬被成

ゟ無用ニ如此國元ニ而御用之事候ハゝ
方々御一た(?)之次第ニ而如此候
段先年ニ而安度(?)以書状申入候
之處持来候所之路次中ニ而者
兼て之首尾候所ニ而中々
付而ハ我等ニ而思召も何も
地者急度ニ御用ニ而被成ニ而事之儀
其之様遣之候

卯月九日

本多上野介

正純

蜂須賀信濃守殿

阿波

尚々御手前之儀去比より大坂表
之首尾ニ而如此ニ付而承候儀其方
遣候處ニ而其ニ者(?)候ニ付而いた

態申入候　大御所様一昨十六日
御入洛被成候　将軍様も今月
廿二三日ニハ必伏見迄可被成
御着候　大坂何篇ニ御分別次第
御承引被成候ニ付御目見可被成候
旨被仰出候　御人数召連候事
陣ニ不及候　其元ハ上方ニ而大坂へ近
所之儀御座候間陣ニ不及候由大坂通
被成御書ニ被成候間申入候　猶
不相替儀ニ而も可有之候条
其方ニも御油断有間敷候

本多上野介
正純

卯月廿日

藤堂和泉守殿

寄ハ大坂方迄押来る由ニ候
處何ものゝ如此ハ可と申ニ
下知にて何方へも不参候
其札被為入候而両安　御前ニ罷
出候所ニ今度是迄押来る由申候
其上大坂表御出馬之如被成候
有之かしめ永ハ其子ら如くこと
此上方にて候此人数治定也當陣
下ニ如く也とも書ニ申来り定る
此國之此御陣之のら如く本所へ出る

大坂方大野主馬殿久小笠原刑
岸和田筋へ罷通り浅野但馬守
近被差添候と志て申しか共不叶お
御座之處ニ去月廿九日浅野但馬守殿
一戦之所ニ敵悪逃首数多討
捕大将之諸兵押を以被討取并團
中先車ら中志討死被討死仕
諸も此方へ参歓之も被敗軍

無正躰て此中ニ候由承及候旨尤ニ存候
為御中大坂表へ被罷出候て御馳走可申候
急度可被仰付候間其方御馳走之儀御用候
此度之忠可為御忠節候也恐々謹言
無御油断候
九月六日
　　　　　平野上野介
　　　　　　　　長純
福島左衛門大夫殿
　　　　　参人々御中

以上
昨日御手紙拝見申候仍御表之儀
付年以後一段御無沙汰之儀御座候
此面之儀付而得其意候御状之趣
不及申候御ゆるし可被成候
　　　　　め水新
　　　　　　秀清
極月廿日
福島左衛門大夫殿
　　　　　御宿所

猶々此由以面談可申承候

従信濃守殿内府へ以使札被申上
候処ニ竹宮柳川表ニ而御働
被成候一戦敵数多被討捕首級
指上候御手柄共内府御感不斜候
付而御信濃守殿以御使被下候
御安心候此野直面目可被成御悦候
恐々謹言

十月六日　　井伊兵部少輔
　　　　　　　直政（花押）

鍋信濃様
　　御報

追而申入候、披判一筆候也
不及申候へ共、乗兵衛儀所々候
今度於柳川表手前之儀不及申
之段及一戦、敵随分之者数輩
討捕被成、手柄之手柄無比類
之由ニ候て、入御精之段御前
能被申上候、何も可申上候、猶
御心得候而可被仰達候

井伊兵部少輔

十月六日　　直政（花押）

鍋嶋信濃守殿

人々御中

幸便之条令啓候、将亦先書ニも
申入候、此度柳川表之儀御
手柄無比類候、御前へ申上

其上并茶入ゟ変趣ニ出候
尚々完成申候 御前御次
国府も別而御深く存ニ存候
左候て 如御帳後日ニ可得御意候

圓光寺

十月廿六日

端年大公

人々御中

権現様ゟ 元佶和尚三要と
申人ニ申上候時 御書写ニ三要と
申候ハ元来私所ニ有之候 足利
学校ニ住仕候を
権現様御気ニ入 御側近ニ而召仕
京都相国寺塔頭圓光寺住職ニ而 伏
新地ニも寺有金地院移候出張所ニ奉
行致 御用所 御前近くし御相伴
仕候後ハ立派へ在候由

まし〳〵遣すへく候
以上
端午為祝儀御帷子三到来候
路次無為悦思召候
御懇之旨達上聞可有披露候
恐々謹言
五月廿八日
安藤長三郎
一史

松平佐渡守
殿

白鳥分御見之
鷹之衆中返候事

以上
去月廿二日之御状令披見候
其方一揆之者被討取首到来

織部殿ニ付獨并家来共ニ質
付死罪ニ相極候処ニ御赦免ニ被遣之
関白ニ而も又御機嫌能思召候段
猶後音之時節可申達候

三月廿日

堀田加賀守
正盛

阿部豊後守
忠秋

酒井讃岐守
忠勝

土井大炊頭
利勝

嶋津薩摩守殿

以上

此状ハ披見仕候去月廿七日織部殿

於大坂城二丸へ悪党忍入九ツ刻ニ
丸の内ニ而放火致附候手負九ニ
押寄及大門悪党居候之由承届
之儀達上聞候処御機嫌ニ
思召候此由各可被得其意候恐々謹言

三月十日

酒井讃岐守
忠勝

松平伊豆守
信綱

土井大炊頭
利勝

阿部備後守殿

同 紀伊守殿

同 甲斐守殿

以上

右御状御付候寛永十年三月廿七日夜
大坂城二丸小屋へ盗入小屋ニ火付

久ケ数多討捕之段附ニ本丸ハ諸手押
寄一揆原不残切捨居城仕候由承
り紀能成ニ候右諸手前之以人
数切ニ手ニ合候旨折ニ候要付而
恐惶謹言

二月十六日

土井大炊頭
利勝

鍋嶋信濃守殿
人々御中

之而紀伊守殿甲斐守殿へ御申
遣ニ以来居候ニ付而
御目ニ懸ケ進之候一下ニ候
御書被讀見ニ而さ候得者表
ニ候ニ付御原島罷出候節ニ
為御目見遣ニ而罷出候ニ付
去ル二月廿七日ニ責落申候已ニ
兎角ニ罷出候哉之事等相

一所ニ被差置候ニ付而も家内人御出
不申候家来共ニ而も数多手負死人
御座候由相聞申候此方之者共も鉄炮下
縦候ニ御手ゟも兵者ニ相渡候
被仰達候ハヽ自然御縦候由来
立退候ハヽ何も可有之候と思召候
等之由ニ付而も当分被為候
時節御機嫌候

酒井讃岐守
忠勝

卯月廿六日

鍋嶋信濃守様
参 御報

松平出羽守

覚　松平相模守

一権現様御書廻文松平三左衛門輝政所蔵

但御自筆

慶長五年

権現様奥州江景勝為御征伐之節

廻文三左衛門同息新蔵其外陣江

但有宇津宮ゟ小山迄

権現様小山ニ御在陣被成石田ニ成候

報ゝ告あり
権現様諸大名を江戸へ集軍法評定被遊
奥州之儀ハ若君上方之儀ハ上杉押ニ被差置
候ゝ福嶋正則東西列細川忠興
輝政を先陣として　御自身者可被為有
本多中務大輔差添攻上之尾
州ゝ人数を差遣候ニ付
上意之趣吉田之城より言上

進発時より村越茂助を以江戸より
御書を被遣其御文言
其許之様子被聞召度候村越茂助
ゟ御諚之通被仰付候御出馬可有之
候由相心得候而可申渡事
江戸ゟ申遣候
八月十二日　家康御判

吉田侍従
池田備中守
九鬼長門守

八月廿二日廻文之衆尾州濃州の境に
名におふ大河をこえんとて評儀あり
正則并西国之勢萩原を渡とて
廻文之衆新加納の川を渡とて
此敵已に定当岐阜よりむかふ時は岐阜
し衆之手勢新加納村にをしかゝれ
城よりも之衆七千余騎は此川を
渡り敵陣を攻とて追撃事二里計
首数七百余以後とふ江戸ゟ注進ニ
及ひける岐阜をも急き評定
あり福島之衆早又今日岐阜城を攻る
事を共にける大将は日一人とてなし

し安芸守に去夜此同廿三日の暁
三丸惣大手を丈夫にて乗込候て長島筋
まで福島孫左衛門一挙ニ城を攻ん
とて兄七郎小攻戦ニ及び二丸寄水の
手より攻より本城へ乗入て一時ニ
落して三万城主織田秀信岐阜ニ
百騎ばかりにてかく籠り候へ共さすがニ
防ぎ得ずしてしに一命

助ヶ本城を退出
検視様左衛門に一戦切ニ御感ニ預
御書二通并御文言

去廿二日注進之状ニ廿六日午刻
着候ニ付岐阜表御働ニ寄ニ度
一戦数千人討捕候并ニ及進候
首級者悉く此方へ相渡

御祈禱巻数給入候、令満足候

八月廿六日　家康御判

吉田侍従殿

改年之祝儀果之、御祈念以太刀給候

書中殊更ニ中納言へ中山殿

可申上候、中村式部等可申候

而申候、紙面ニ於テ御懇志一ツ我ニ

父子御訪ニ而悉之遣之

八月廿七日　家康御判

吉田侍従殿

態以加藤源太郎申候、今日勤白候

新参門出馬申候、中納言使を相語候

頼宣義ハ松平御陣取ニ付今
度之御手柄無比類義ニ付而ハ右
我等父子を引立候 御懇志之段委細
得ニ申候条不能詳候恐々謹言

九月朔日 家康御判

清須侍従殿

吉田侍従殿

右之通 御書松平作右衛門方ニ

所持仕候

是より美野ゟ本陣として大垣の城

を攻給九月十四日

権現様赤坂岡山より出馬御着陣被成

翌日軍御評定何事かく合戦を遂

らるへしと勝利より日ノ出毛利秀凡

会南宮山より陣を引通り候といへとも
其節ハ御味方なされはいかんと存候
三成并南宮山の陣を押居三成并
日頃ハ石田治部少輔陣ニあつまり候上
権現様後陣を立押給ふ所ニ執ニ出候
ゆ振ニて　上意して慶長十五日
関ヶ原御合戦ニ大ニ打勝勝利　南宮山
の会も又退散して天下一統同十月軍

功ニ依て吉田城替して播磨国を
拝領仕候

一権現様御直書御文松平三左衛門尉頂
戴仕候由執
慶長十九年大坂御陣ニ三左衛門忠継　十六歳
十一月七日摂州大和田川ニ陣して川を
渡り敵を追崩し二備し　御城ニ近き
仕候ニ付而　御書ニて御文言

河越ニ而大和田段兵衛ニ申付候

一、段々御稽古之上、思召ニ叶

十月七日　御黒印

松平左馬助とのへ

一、下口進発仕候処、小陣しき馬鐙にて
介抱をせいで、城中より鉄炮甚打し
秀忠様危く、御前様、脇ハ則ち

楯をつき、稽の所にて、大筒を放

打城中にて振下る

並御所様ハ軍功を致し、御国中

一、権現様御国御父、松平玄蕃頭忠成家
来横川次大夫、其外浦勘右衛門、右二人ハ
仕候也

慶長十九年大坂御陣にて、文蔵門口殿

一
今度於津之国之舟船之筆済之
其之御楽劇小出而之平子之撥之横川
吹笛文対擂管弦勤之事而内宴船之参不残候
之御感状之頂戴仕之御文言

今度於大坂表御楽劇合競進候
歌劇対擂前之條指貴之而
御感思食之也

十二月廿四日　御判
横川吹笛文とのへ

今度於大坂表操文弾指貴之
條御感思召也

十二月廿四日　御判
箕浦勘太夫とのへ

一 台徳院様御書文松平右衛門佐備後守

写

今度大坂籠城之砌入精出来
殊更右衛門佐手前入念無比類
候思召候、猶以可抽忠節候也

十二月廿日 御黒印

松平右衛門佐とのへ

今度大坂籠城之族成敗之事入
念候而申付早速出来候段可然候也

九月十日 御判

備前
宰相殿

以上

寛永元年霜月廿六日

松平相模守家来

覚

従

権現様御父松平三左衛門輝政ニ御感状

御書ニ而外様候得共松平御称号

松平相模守事付候上候通ニ候

一元和元年卯大坂表御陣ニ付親石見守

十二歳ニ而奉御供仕家来ニ而召連御感状

出雲并ニ御供者共ニ候

一 親石見守輝澄初名松平加代播磨之内
宍粟郡佐用郡弐郡ニ而石見守二歳之
一 附母 良正院殿ハ右之通播州姫路
殿府ニ死去
権現様之御息女ニ而附良正院殿ハ
中上候者 西郡様ト申候 日蓮宗ニ而私
相継申候 松平加代ニ 日蓮宗譲テ召居候
権現様御宗旨ニ成申候 取ニ領申上候也
右思召則松平加代御勝申候 右寄附無之
頼候ニ付祖母西郡宗旨ニ而被成候致し上候
父三左衛門名字池田ニ改 祖父之名字松平ニ
被成候 武安修理ニ而ニ候其右之通候
上意ニ而ニ右之通 御小姓相勤
一 寛永年中行幸之節 附従御供仕候
御射猿色禁色并着用御免之
同断

台徳院様
大猷院様原〃守〃馬ニ 御付
上覧ニ被 御機嫌ニ入ニ候段
台徳院様御実之 御勝物候
大猷院様判并家之 御勝物被殊取
被仕候
貞享元年
四月廿六日
松平久馬助

覚
候
権現様御又松平之元忠輝被 御感状
御書其外頂戴仕候義ニ而 松平伊豫守
松平右衛門書付差上候通ニ御座候
一親共見〃義松平久馬助申上候通ニ御座候
候

権現様御目見ニ而被仰付候古来之御小姓
并右見ニ而私共其上不相替仕候由緒有之者
御感状御褒美并被下候者無御座候
貞享元年
六月二日
池田勝之丞

覚

従
権現様為祖父松平三左衛門輝政ニ御感状
御書ニ所持仕候然又松平伊豫守
松平相模守方ニ右之通ニ御座候

一 祖父松平右近大夫御感状御書并
所持仕候并ニ松平之若御感状并御褒美
被下候ものハ無御座候

一祖父右近大夫輝興初名右七郎播磨之
国赤穂郡ニ而出生右近大夫罷成ニ付
一母良正院殿江連従播州姫路駿府江
罷下り
權現樣江御目見仕其上江戸江罷下り
台徳院樣大猷院樣江御目見仕上候
台徳院樣 廣光御脇差被下置候
一寛永十一年 御上洛之時従四位下ニ叙

仰付候
貞享元年
四月廿七日　池田權之助

従
權現樣御感状弐通御書私先祖ゟ所持
頂戴仕候儀無御座候
一曽祖父池田備後守重利儀池田三左衛門

一 輝政娘ニ而彼家ニ居申候処慶長十九年之冬
権現様駿府ニ而為召御目見仕候ニ
御意之趣此方為召候処御黒印被下
御馬并附役等拝領仕候池田越前守惣領
居尼崎之城ニ而正月もこの池田武蔵守
利隆ニ依 御意彼御城ニ相残大坂御陣
当年之内当国ニおゐて作付候大坂落居候
元和元年之秋二條 御城ニ而 右尼崎
之城当国ニおゐて 上意之上為加増
摂津国河辺郡領知之内取合壱
万石新規ニ拝領之 御黒印頂戴仕候
右播磨御譜代並ニ相勤之候処
御当元和三年ニ至尼崎之城被召上候
以後播磨国ニ而替地 御朱印
一 台徳院様 御代福嶋左衛門大夫正則御改
易ニ付広島城請取之節池田越前守利

従播磨而藝州廣嶋江被参候中ニ而多限之
儀ハ吉兵衛方へ門連候而渡之
上関御加被持欽方不並ニ候而ハ彼地迄
送りし上ニ備後國鞆迄罷出　伊丹半平
貞享元甲子年十二月廿八日　池田治兵衛
阿部豊後守様
堀下総守様

松平伊豫守

松平三左衛門源輝政 家譜抜書

文禄三年依秀吉命輝政為

家康公聟

慶長三年八月十八日大閤秀吉薨為遺

物賜吉光脇指

同五年廿家康公征伐奥州景勝輝政同

子新蔵為先陣著宇都宮 家康公陣于

小山于時有石田三成謀叛之告

家康公聚諸大名有軍評定欲弃奥州進發
上方以輝政與福嶋左衛門大夫正則為
先陣以井伊本多為臨諸大名逐日上以
駿遠三尾四州之人質預置於吉田城猶
益進發時村越茂助自江戸持御書馳来
其詞云

其元模様兼度候而以村越茂助申候
御談合候而可被御越候出馬之儀者
油斷無之候可御心安候委細口上申
候恐々謹言
八月十三日　家康公御判
吉田侍従殿
池田備中守殿
九鬼長門守殿

八月廿二日輝政等著尾濃之境明日有

可渡大河許議正則并西國勢可渡萩原輝政可渡新加納河議既定各向渡口于時浅野幸長從輝政同向之岐阜兵三千餘騎出新加納村拒之輝政兵七千余騎並轡渡河攻敵陣追撃二里許首數七百餘遣使註進江戸及晩有明日可攻落岐阜之許定福嶋怒今日空許而云明日大手口一人可攻兩奉行同其議廿三日暁

輝政先于福嶋経町到永良河福嶋弥怒欲一挙抜城攻戦七曲其間輝政自水手攻上著本城立其幟城主織田秀信纔百騎許不及拒乞和諸将憐秀信志助一命置芋洗里岐阜没落後福島欲請取岐阜城輝政曰乗城者無先于我兩奉行擬議福島嗷訴不已兩奉行謂輝政曰大敵在前不可争雄枉宥怒之輝政以親縁故仕

両人福島請取之同註進江戸 家康公
感両度戦功賜御書三通于今所持之其
写云

去廿二日之御註進状今廿六午尅参
著候其元川表相拘候処被及一戦數
千人被討捕岐阜江被追付之由誠心
地能儀共候弥各被相談御行御吉左
右待入候恐々謹言

八月廿六日 家康公御判

吉田侍従殿

岐阜之儀早々被仰付処御手柄何共書
中難申尽存候中納言先中山道可押上
由申付候我等者従此口押可申候無聊
尓様御働専一候我等父子御待尤候
恐々謹言

八月廿七日 家康公御判

吉田侍従殿
態ト以加藤源太郎申候今日朔日至神
奈川出馬申候中納言使罷帰候趣具承候樽
井御陣取尤候今迄御手柄共難申盡存
候此上者我等父子御待付候而御働尤候委
細口上申候条不能具候恐々謹言
九月朔日　家康公御判
清須侍従殿

吉田侍従殿
自是陣于青野原縮于大垣城九月十四日
家康公著赤坂圓山召諸将有軍評定明
日可遂合戦自勢列廻来毛利等兵陣于
南宮山雖有内通若詐成約不可奈何輝
政可押南宮陣輝政曰願當石田浮田島
津公曰我後陣也枉従之輝政肯之十五
日戦于関原大勝南宮山兵亦退散天下

国立公文書館
National Archives of Japan

一統同十月依軍功轉吉田賜播磨
同六年正月於大坂賜飛驒肩衝二月
秀忠公入御輝政宅以件肩衝催茶會于
時御大刀銀子等拜領
同八年 家康公為征夷大將軍參 内
輝政任少將乗輿扈従
同年四月賜備前國于息忠継為拜礼下
向江戸 秀忠公大喜遣酒井賜在府中
粮米輝政謁見献式様進物并方物種々
殿中催茶會及帰国賜御腰物虚堂墨跡
名馬二匹号鳳凰栗毛 騏驎蒼 驛送被添大久保加賀守
安藤對馬守到箱根以慰勞之
同九年於伏見宴于 家康公賞賜數百
同室家賜黄金二千両有御對面
同十年五月宴 秀忠公催茶會賜御太
刀銀子等同室家賜黄金呉服

同十一年正月江戸下向築石壁自西
御所賞賜鉅万殊賜俊鷹狩武野近邉亡、
月歸國賜御腰物名馬
同十二年築駿府城
同年七月三日有 勅 後陽成院 被下御太
刀御馬傳 奏廣橋大納言勧修寺中納
言也立入河内守為使節下向播州傳
者
同十四年築丹州篠山石壁

同年被止西國安宅舩輝政獨賜大安宅
号紀伊丸
同十五年二月拜謁駿府于時以三男忠
雄可為淡路國主旨直蒙 上意及告暇
賜馬鷹
同年夏與諸大名築那古屋石壁
同十六年築 禁中石垣
同十七年正月輝政所労自江戸駿府遣
使問病数度且又被附牧野伊豫守爲殿

△廿ノ字脱カ

兵庫助撫養之病氣快復八月駿府下向
以本多上野介慰勞之翌日謁見獻式樣
進物被下御盃又宴于殿中　仰曰自
江戸歸路之時可催茶會同廿二日詣江戸
以土井大炊頭慰問之謁見時獻式樣進
物後宴于殿中賜蜂屋郷刀名馬二匹号
南部黒鼠毛　仰曰可任參議殊賜松平氏
同日以古田織部為御使賜乙御前釜同。

七日發軫九月三日著于駿府翌四日朝
如約有御茶會相伴者山名禅高藤堂和泉守懸
虚堂墨蹟茶會了賜虚堂又於書院賜若
狭正宗刀馬鷹被免攝州鷹場
同十七日上洛翌十八日參　内依參議
拜禮也
同十八年正月廿五日輝政舊病再發卒
于播州姫路城五十歳　號國清院自駿府

江戸遣使節聘銀各數百枚

松平武藏守源利隆家譜抜書

利隆初名新藏生于濃州岐阜城
慶長五年奉従　家康公而奥州進發
同年関原御陣為先手美濃國河越随父
有功攻岐阜城斬首數百具記輝政條下
同八年弟藤松忠継領備前國依尚幼稚而
利隆代知之
同十年　秀忠公上頡于時利隆任侍従

右衛門督拝領貞宗脇刺
同年秀忠公養榊原式部太輔康政女
為子而嫁利隆青山播磨守忠成為渡輿
役土井大炊頭利勝勤貝桶役
公賜青江御腰物龍文字御脇指并馬二
匹
同十二年利隆発自上方為参勤始到着
於江戸秀忠公賜松平称號兼任武蔵

守賜長光太刀龍安吉脇刺迨
暇拝領鷹馬二匹銀子呉服此時為鎌倉一
見鶴殿兵庫助被相副依為案内者也著
于駿府謁家康公賜鷹馬
同十三年下向江戸及暇　秀忠公賜行
光脇刺
同十四年勤丹州篠山普請
同年光政誕生。秀忠公聞之為上使牧

野豊前守来訪拜領帷子単物袷銀子等
且以備中國領知千石賜光政如
同十五年勤尾州那古屋普請
同十八年利隆在江戸聞輝政病氣再發
之由賜暇帰國拜吉囯光近将監助光刀
正月廿五日輝政卒於播州姫路城利隆継
家督賜播磨國往于江戸駿府為拜礼
秀忠公賜志津刀 家康公賜御馬

同十九年江戸城普請勤之
同年大坂作乱冬出張尼崎渡神崎川會
殺數十人渡中津川進著天満口攻圍後
大坂和睦謁二條亭 両御所持慰軍労
賜銀子三十枚
翌年大坂又乱利隆出張難波追焼大和
田數百家落城之日献首千餘級
元和二年利隆於江戸病悩賜暇上帰為

慰問牧野傳藏来六月十三日卒時三十
三歳號興國院自江戸賜賻銀數百枚
貞享元年甲子四月廿六日　松平伊豫守

松平伊豫守家臣

国立公文書館
National Archives of Japan

覚

一 曽祖父永井清右衛門儀織田参河守様ニ而
小姓ニ相勤十六歳ニ而家老久世但馬ニ御座候
候ニ付久世仕候由申伝候清右衛門父ハ
永井善九郎と申者ニ御座候
権現様ハ御存ニ而御座候由ニ而小田原御陣ニ而御落
然所御懇之儀
権現様御代之返 蒲生氏郷ニ被成御預家ニ

右清兵衛為養子罷在候処永井道琢ニ申付
其後参河守様へ被召出弐拾石下行被仰付候
右之外
権現様御旗本ニ被召出清兵衛も右之者共父一
類ニ立退文字屋と浪人仕ノ大坂御陣之節
権現様御馬ニ被成御供罷出文字屋三郎兵衛
之者御先ニ而御感被仰付候文七年之内御留
同倅弥兵衛并右之清兵衛文字屋ニ而申上候

三四郎殿方ニ而
将軍様御陣所ニ被召出候ニ付
上意之趣ニ付御渡候其節清兵衛十八歳ニ而
大坂御陣中ニ付御供仕御渡候大坂御陣
陣之後元和二年
将軍様ニ被召出清兵衛ニ御知行文字屋
同弥兵衛ニ力十騎ニ是非文十人被下候
被仰付并清兵衛上意文面之ニ被召出清兵衛為

本家ハ山縣清兵衛ニ以知行文子五百石被下置
与力十騎足軽大将ハ被仰付候、御付御座候
八郎右衛門

一 祖父善兵衛ハ清兵衛嫡子ニ而以後様子ニ
仕候処未御目見不仕内ニ父清兵衛相果
申候御目見之後被仰付候右清兵衛相果候之以前ニ
板倉右衛門様御座候中ニ付善兵衛儀未 御目見
不仕候而御座候中へ被仰遣善兵衛儀

御目見 仕付候得ハ右之通ニ被申上候様ニ承候
内膳正殿此旨御申渡被成 土井大炊頭殿へ被
申上候処大炊頭殿御案内被成右衛門様
正殿大炊頭殿へ被仰付候右衛門殿ニ被為成候ニ付
死以後ハ歳斗方ニ被下候事ハ二歳成候ニ
永々被差置候半之ニ病死仕候右知行
御奉公相勤候様ニ被仰付候得共申上候
以上

同月廿六日

宛行知行分之事

松平伊豫守内
永井清太夫

一 高百弐拾八石七斗九升五合　西方庄 一ヶ場村

一 高三百拾六石四斗三升九合　三方庄 下高村内

一 高弐百卅石弐斗　西方 牛鍬村

一 高弐百石　三方庄 楢田村之内

一 高弐百弐石八斗　九品庄 湯田村之内

合千弐拾石

右令扶助畢全可知行之状如件

慶長八年正月九日 御朱印

長井出雲守

武蔵国之内荏原郡柿木村
弐百四拾五石余比企郡二ヶ村
弐百七拾一石上総国市原郡
二ヶ村百八拾三石六斗余
武射郡富田村八百拾六石
六斗余多摩郡二ヶ村七百石
夷隅郡七ヶ村弐千石都合
四千石　此内弐千石与力給
目録在別紙　事令
扶助之訖全可知行者也
寛永二
十月廿三日　御朱印
永井信濃守とのへ
上総国武射郡新田村
四百八拾三石四斗余市原郡
瀬口村之内九石五斗余

流山村之内七石余合九百石
之事ニ拝借之儀全可
知行者也
寛永二
十月十四日　永井信濃守
永井清左衛門とのへ

覚

一　高百弐拾三石壱斗弐升八合　上総国 永井右近大夫上総内 大作村

一　高八百拾六石六斗三升壱合　同国同郡 冨口村

一　高弐拾七石八升九合　同国同郡 湯口村之内

一　高三石三斗八升弐合　同国同郡 久貝津村之内

高合五石之所長野喜兵衛へ
永〻当宛行之条全可令領掌
仍如件

元和三年
巳六月日

伊 豆守 御書判
安 對馬守 同
土 大炊助 同
酒 備後守 同
酒 雅楽頭 同

天明内匠丞 右

覚

一 高四百八拾三石四斗弐升八合　上総之国 長柄郡之内　新田村
一 高九石六斗四升弐合　同郡同村　瀬沼村内
一 高七石　同郡同村　流山村

高合五百石之所長井
清左衛門ニ宛行畢
全可令領知者也

元和三年
十月日

伊賀守勝重判
大炊助同
安對馬守同
酒備後守同
酒雅楽頭同

本多上野介同

日本政府図書

己巳四月十三日
校了

伊岌
後岌

国立公文書館
National Archives of Japan